



東京理科大学 助教授

山名 善之

卒業設計タイトル
The "Wall" Museum in Berlin

プロフィール

1966年 東京都生まれ
1990年 東京理科大学工学部建築学科卒業
1990-94年 香山アトリエ・環境造形研究所勤務
1995年 パリ・ベルヴィル建築大学（フランス政府給費留学生）
1996年 Patricia YAMANA と Atelier YAMANA 開設
現在 東京理科大学助教授、フランス政府公認建築家（DPLG）博士。

Q 卒業設計のコンセプトのきっかけ、デザインについて教えてください。

山名 何を設計のテーマにしようかと考えていた時に、高校の頃、すぐ横に米軍のキャンプがあったのを思い出しました。塀で囲まれていて金網越しに眺めることしか出来なくて、一歩中に入るとそこはアメリカなわけです。そんなことから境界（リミット）って何だろうということを考えはじめました。アメリカ・日本の対立の中で建築を作れないかと…。そんな時、1989年11月10日、ベルリンの壁崩壊のニュースが目前で流れた。それまで自分の中にあった問題設定をどう設計として解決し得るか、その解答としてベルリンの壁を扱おうと思ったのです。11月10日というある一時点から、東と西を隔てる物理的な壁が、残っているところはありながらもその意味を失ったわけです。その意味も含めて東と西の境界線上にベルリンの壁のミュージアムを作ることになりました。デザインについてはリミットに対して新たな境界を認識するような壁を作りたいと思い、意味の希薄になった壁ということで透明感のあるような建物を構想しました。

Q 学生時代に興味のあったことは？

山名 新しいものを見るということはもちろんよくやってたけど、それよりも古いものが好きで、京都や奈良によく通っていましたね。

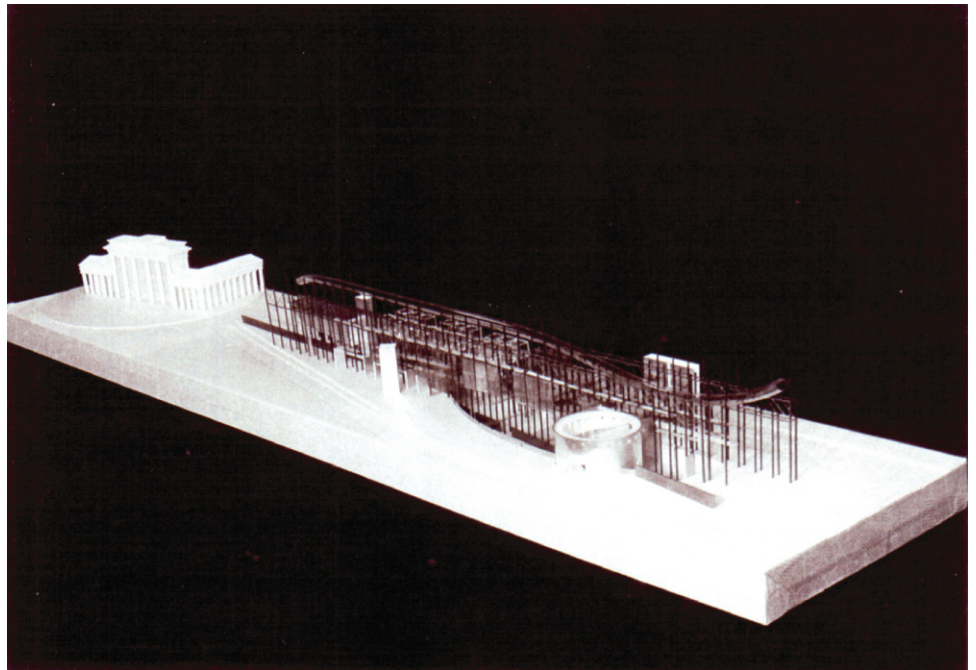
Q 最初に海外に行こうと思ったきっかけは何ですか？

山名 大学2年の時にカーンの本を読んだものの、なんだかよく理解できなかった。それで卒業設計提出の翌日にカーンを見ようとアメリカに行きました。そういう環境で勉強したいと思ってたし、ずっとパラディオに興味があったので、西海岸からニューヨークへ、そこからヨーロッパへ渡りました。建築を見たり、有名大学の設計スタジオも見たりしました。ベルリンの敷地もその時初めて見ましたね。

Q 当時影響を受けた建築家は誰ですか？

山名 パラディオ、カーン、香山（壽夫）先生ですね。

Q 卒業設計は現在の活動とどのようにつ



撮影：細矢 仁

ながっていますか？

山名 卒業設計をやりながら、自分が良くも悪くも実はアメリカが嫌いだったということに気づきました（笑）。昔はアメリカが中心でその下に僕たちが生きていた。しかし、ベルリンの壁が壊れたことによってそんな絶対的な二項対立ではない世の中のあり方になった。卒業設計を通して、それを自分の人生の価値に置くことが出来ました。設計者としての現在とのつながりに関しては、反省点になってしまうのですが、この卒業設計ではコンセプトチュアルにとか、記号性とか、形式的に考えることに重点を置いていた。今思えばそれは空間性を乏しくさせていることに繋がります。けれども建築の「透明性」ということに関してはその時から考えていたことだし、これからも考えていくことだと思います。

Q 現在興味のあることはなんですか？

山名 最近読んだ本で、哲学者スティグレルの『象徴と貧困』というのがあって、ハイパーインダストリアル時代の危険性について指摘しています。それが最近僕が色々考える上でのベースになっているかも知れない。自分の趣味趣向をどこかに投げかけると、それに賛同する人が一斉に集まって、すぐに消費されてしまう。例えばそれが商品開発に繋がったり、もはや個々のもので

は成り得ないような状況が出来上がっている気がします。設計行為でも、自分の為にしているのではなくて、ある認め合う社会、想定された社会の上に設計していることになりかねない。それでいいのかということ最近考えています。

Q 最後に学生に一言お願いします。

山名 僕たちの頃のような消費の激しかった時代と違い、不景気と言われる今ですがこれはゆっくり建築について考えられるいい状況であると思います。壊しながら建てていくこととは違い、街を作るという意味でも、これからは壊さずに建てるのが本当に建築をやるということなんじゃないかと思っています。



南馬込K邸

撮影：関 健一